

第7回中村元東方学術奨励賞（2021年度） 選考委員会意見

受賞者 松川雅信

受賞作 『儒教儀礼と近世日本社会——閻斎学派の『家礼』実践』

選考委員長 中島隆博

本書は、近世日本社会研究において儒者たちが『家礼』（『文公家礼』、『朱子家礼』）に記載された儒教儀礼にどう取り組んだかを思想史的に明らかにしようとしたものである。

従来の研究では、近世日本社会において儒教が非特権的であったことや仏教が社会勢力として優位にあったことから、儒教儀礼不在が前提とされていた。しかし、吾妻重二や田世民らの近年の研究によって、その前提が覆され、『家礼』が重要な問題であったことが明らかになっている。それを継承しながら、本書は山崎闇斎の学派に焦点を当てて、『家礼』がどのように実践されたかを、正確な史料読解と地道な調査研究にもとづいて、詳細かつ広範に論じた労作である。

全体は二部に分かれ、第一部では闇斎学派の浅見綱斎を中心に儒教儀礼の実践に関わる理論的な問題が論じられた。浅見綱斎は、『家礼』を「士庶人」という一般の人々を含めた多くの人に開かれた儒教儀礼として受け止め、「庶人」という自意識を有する儒者にふさわしいと考えた。その上で、「本」と「文」の区別を行い、「礼」の根幹である「本」と具体的な儀礼実践である「文」は異なるとし、日本においては「文」においては日本にあった仕方でいささか変更することで、「本」を実現しようとした。それは、朱子学を、「理」という抽象への理解というよりも、「物」という具体的な事物への注目として理解する態度と軌を一にしたものだと指摘する。思想史的理解としても啓発的なものである。また「理」に関しても、〈理〉という表記のもとで、朱熹とは位相を異にする理解を行い、鬼神の来格を説明しようとしているという指摘も興味深い。

第二部では、具体的に『家礼』がどう実践されたのかを、尾張地域と上総地域において実証的に検証している。それは、寺請・寺檀体制下においても実践可能な儒教の葬送儀礼、すなわち儒仏併用の儀礼を具体的に示したものであって、儒教儀礼をなしえないとの徂徠学派への批判にも目配りをしている。さらには、『家礼』を通じた東アジアという文脈での「東アジア思想史」への意欲も示されており、大いに将来が期待できる。

それでも、当時の仏教への視野が限定的である点や、闇斎自身が移った神道との関係など、関連分野への目配りがやや物足りないところは残るとの指摘も出された。それは本書が採った闇斎学派における『家礼』の受容と実践への限定のゆえではあるが、あえて記しておきたい。

こうした望蜀の点が残るとはいえ、文献学的にも行き届いた思想史研究として、充実した

論述を行っている点で、本書は中村元東方研究所学術奨励賞に十分に値するものである。選考委員会は一致して、当該賞の受賞作にふさわしいと考える。